

時事新報

明事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり

明事新報には毎號詳細なる商況物價の報告あり

明治廿七年二月廿五日
農曆甲午正月二十日（戊戌）

正誤 昨日の社説中二十一行目大廻脚とあるは印度
事務大臣の誤

○生きてる死體（外國笑話）

爰は北米台東國某府なる合衆黨領事の密室に於て甲乙二名の策士が鼻を突附けての帷帳の計略、良からぬ事を計画ひ真最中、甲は切出して云く

誰も相談整ひけるが時方より來りけるが如く

時に乙君の佐藤甘蔵と云ふ者は子君も知る通り其風聞を高からしめたるが如し元來書肆の聲が自家出版の書を披露して探定せられんことを恥むるは素より

されど居りたりハナナガ草履の如くに人望

したが從來の弊害を免る可しとの意に出でたるみとならんれども舊弊は矢張り止まざるのみか却てます／＼

其風聞を高からしめたるが如し元來書肆の聲が自家出

版の書を披露して探定せられんことを恥むるは素より不當の事に非ず其目的とする所は唯營利の一方にして其風聞を高からしめたるが如し元來書肆の聲が自家出

版の書を披露して探定せられんことを恥むるは素より

不當の事に非ず其目的とする所は唯營利の一方にして其風聞を高からしめたるが如し元來書肆の聲が自家出

版の書を披露して探定せられんことを恥むるは素より

時事新報

時事新報</